



今月のことば 平成21年 8月 <No.36>
お浄土があってよかったね

茨城県のある病院での、医師と患者さんとの会話。

医師：「Tさん、今度は治らないかもしれないですね。」

患者：「そう？ やっぱり…。」

医師：「Tさん。お念仏はね、仏さまの声なのよ。“お浄土があるよ、仏さまと一緒にいるのだよ”と。今、仏さまはTさんを抱っこしてくださっているのよ。心配ないのよ。お浄土があってよかったね。私もTさんの後から必ず往くからね。」

患者：「先生、ありがとう…。」

みやざきホスピタル副院長の宮崎幸枝先生は、「医者とは坊主でもあれ」という信条の元、たとえ治療が困難になった末期の患者さんに対しても、「苦しくてもあきらめるな」という言葉ではなく、「私たちにお浄土があって良かったね」と、声をかけ続けています。



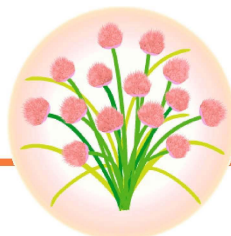
世の中では「自分の死」について真剣に言おうものなら、即座に「弱気になっちゃダメ」とか、「そんなエンギでもないこと言わないで」と押し戻されるのがオチ。医療従事者でさえまともに話題にすることを嫌がる。高齢者や病を得た者は、内心とはウラハラに、なんともない顔をして黙って暮らす。きっと、孤独であろう。本当は、誰もがそれを一番気に病んでいるにもかかわらず…である。

宮崎幸枝『お浄土があってよかったね』より

私たちはいずれ必ず迎える死を、どのように受け止めれば良いのか。私たちの「いのち」は、どこへ向かうのか…。病院は、日頃私たちが考えないようにしている大切なことを、目の前に突きつけられる場です。

その現場のまっただ中にいる宮崎先生。病院に僧侶を招いて法話を聞く会を開き、仏教書を読むサークルを立ち上げるなどの試みをしながら、**平生からの「死の準備教育」こそが、「今を大切に生きる」ことにつながる**と言います。

決して治らない老化・病を、必ず迎えると知っているのが、本当の人間である。仏法による生死の解決で、「絶対的な安心に満たされた人生」が始まるであろう。真に私を丸ごとまかせられる仏に出遇わせてくれるのが、仏教である。



それは、無限の安心に出遇うことであり、「一生の意味」「生きる喜び」「感謝」とか「生かされている」という言葉がはっきりし、目が覚めるようにスッキリとさせてくれる。

